

〔研究論文〕

**大英博物館 Manga 展に見る日本の視覚文化への眼差し(1)****本浜 秀彦**

〔Article〕

**Manga Exhibition at the British Museum and Japanese Visual Culture****Hidehiko MOTOHAMA****Abstract**

The purpose of this paper is twofold: first, to examine the manga exhibition held at the British Museum in 2019 by paying appropriate attention to cultural history in both Japan and the UK; and second, to analyze the exhibition of manga arts by using research methods developed in the research field of Japanese manga. Throughout my discussion, I will attempt to shed a new light on the approach to the studies of Japanese visual culture.

[This paper is the first paper of three papers in a series on the above topic.]

**はじめに**

本稿は、2019年5月から8月の約3か月にわたり、英国・ロンドンにある大英博物館(The British Museum)で開催された Manga 展に関する3回にわたる論考の1回目である。

日本の代表的なポップカルチャーであるマンガやアニメの海外での人気は、近年高まっているという情報は、もはや旧聞に入るのかもしれない。中国、台湾、韓国、タイ、インドネシアなど、アジアにおける日本のマンガやアニメの人気は根強く、米国では、ジブリ作品や「ポケモン」などに代表されるアニメの評価が高い印象を受ける。

絵画や彫刻など、視覚文化の豊かな歴史を持つヨーロッパの国々でもマンガは幅広く受容されている。マンガは、Manga とアルファベット表記され、フランスのパリやベルギーのブリュッセルの大型書店では、バンド・デシネ (bande dessinée) と並び Manga コーナーがごく普通に設けられている。「サッカー王国」で知られるイタリアでは、高橋洋一「キャプテン翼」の熱狂的なファンが少なくない。

そうしたヨーロッパの国々でのマンガ受容と比べ、英国はどちらかというと、これまで日本のマンガやアニメが広く受容されていたとは言い難かった。例えば、英国のマンガ売上は、2018年、フランスの1670万冊に対し、その20分の1ほどの88万冊にとどまる<sup>1</sup>。ルイス・キャロル「不思議の国のアリス」やピアトリクス・ポター「ピーターラビット」シリーズ、最近だと J.K. ローリング「ハリー・ポッター」シリーズなど、読者層がマンガと重なる児童文学の、英国の豊かな文化を見ると、マンガによる「物語」をこれまであえて必要としていなかったのかもしれない、という仮説でも立てなくなるほど、マンガへの関心が高くなかったお国柄である。

そうした英国で、マンガの本格的な展示会がミュージアムで開かれたことだけでも画期的な出来事なのだが、その開催場所が大英博物館となれば、それは文化史的にも驚くべき「大事件」だったに

違くない。言うまでもなく、大英博物館は、歴史的な遺物・名品・名作などを収集・展示している、英国のみならず世界屈指のミュージアムであり、近代ミュージアムの誕生やその歴史は、同博物館を抜きに語ることはできない。では、そのような世界の“文化の拠点”である大英博物館を会場にして開かれた Manga 展は、いかなるイベントだったのか。本稿執筆時点で、その全体像を見渡した本格的な論考は管見の限りまだ登場してしない。最近の動きで目立ったのは展覧会の図録の日本語版が出されたことくらいだろうか<sup>2</sup>。

筆者は、Manga 展が開催された期間を含む 2019 年 4 月から 2020 年 3 月まで、在外研修のため英国・ノーリッジ(ロンドンの北東、電車で約 1 時間半)に滞在していた。その間、セインズベリー日本藝術研究所に在籍し、視覚文化の研鑽を重ねたが、実は同研究所は同展に深く関係しており、展覧会の企画・展示の中心となったのは、同研究所と大英博物館を兼任する二人の研究員であった。渡英前からその事実について十分知っていたわけではなく、偶然でしかなかったが、その幸運のお陰で、ときには同展の開催期間中に訪英した著名な日本のマンガ家のワークショップや食事会などに参加する機会を得ることとなった。そのような経験は、Manga 展そのものの展示に加え、Manga 展の「外部」の環境——ミュージアムやメディア言説についても否応なく関心を広げさせた。

筆者は同展に、(研究・調査で、あるときは家族との観光で、ときにはロンドンでの空き時間の時間つぶしで)20 回近く足を運んだ。それは大英博物館という世界的なミュージアムの企画展示を“フィールドワーク”したことにほかならない。その経験も踏まえ、大英博物館の Manga 展を総体的に俯瞰し、また展示についてはその詳細を記述することは、日本の視覚文化の記録としても大きな意味を持つに違くないと考えるようになったのは自然の成り行きだった。

一連の論考の目論見は、Manga 展の展示の全体像を明らかにすることを大きな柱とし、それとクロス分析させる方法で、ミュージアムとマンガの関係、マンガをめぐるメディアの言説、マンガ研究史における Manga 展開催の意義について考察することである。さらには、マンガを含む日本の視覚文化に対する自己認識(イメージ)、および他者(「海外」)からのイメージ・評価についても検討する。そうした分析を通じ、日本の視覚文化に対する自己認識と海外から投げられる「視線」との「重なり」、あるいはその「齟齬」について明らかにし、マンガという視覚文化への新しい研究アプローチを試みる。

3 回にわたる論考は、次のような構成になる。まず 1 回目(本稿)は、マンガとミュージアムの関係について、マンガミュージアム(「マンガ関連文化施設」)の数が圧倒的に多い日本の事例を中心に探る(第 1 章)。続いて、大英博物館での Manga 展開催をめぐる日本国内の反応について、新聞、テレビの報道を中心に、そのニュースの「伝え方」の言説を分析する(第 2 章)。

2 回目の論考では、英国における Manga 展開催の反応について、英国の新聞、雑誌メディアの報道を中心に分析する(第 3 章)。そうした展示会に対する日英の反応を確認した上で、同展で作成された図録について分析する(第 4 章)。通常展示会の展示の準備と並行して制作が進められる図録は、ある意味、展示内容の「設計図」のようなものである。実際の展示について分析する上でも、その考察は有効だと考える。

そして最終 3 回目の論考では、Manga 展の展示内容を、これまでのマンガ研究が明らかにしてきた事項と照らし合わせながら、詳細に検証し(第 5 章)、その上で同展開催が、マンガ研究を含む日本の視覚文化研究に与えた影響と、マンガとミュージアムをめぐる今後の課題について検討する(第 6 章)。

関係者によると、大英博物館は Manga 展に関する評価・分析を外部機関に依頼し、その評価(自

己点検)を行うということである。Manga展の調査・研究として、ミュージアム研究でしばしば採用される来館者のトラッキング調査の手法なども考えられる(し、実際に行われたかもしれない)。しかし本論は、博物館展示の展示内容そのものの分析を、来館者の視線から考察することに加えて、大英博物館の展示(それは英国側のマンガ研究の成果でもある)が、これまで研究を深化させてきた日本のマンガ研究の成果とどう呼応し、あるいはどのような違いがあるのかなどの分析に力点を置く。

## 第1章 マンガとミュージアム

### 1. 「マンガ」と「ミュージアム」の“出会い”

英国でManga展が開催されたことの重要な意味は、何よりも大英博物館とマンガが「出会った」ということに尽きる。現時点からすれば、世界屈指のミュージアムとマンガとの“コラボレーション”は、実現した既成の事実として簡単に捉えられるかもしれない。だが、そこに至るまでは、マンガとミュージアムの“出会い”、マンガの展示方法など、さまざまな試行錯誤の積み重ねがあり、一方で大英博物館側の、ある種の「英断」があったと考えるべきだろう。

その手掛かりとなるのが、日本におけるマンガミュージアムの事例である。日本には、およそ「50～60館」ほどのマンガミュージアムがあるとされ<sup>3</sup>、おそらく世界でいちばんマンガミュージアムの多い国に違いない。大英博物館もManga展開催にあたっては、日本の主要なマンガミュージアムを大いに参考にしたはずである。

日本におけるマンガミュージアムの企てや経験については、これまでもある程度の数の論文やエッセイが発表されている。一冊にまとめた本では、表智之ほか著『マンガとミュージアムが出会うとき』、伊藤遊ほか著『マンガミュージアムへ行こう』や、マンガ以外のサブカルチャーも射程に入れた石田佐恵子ほか編『ポピュラー文化ミュージアム』などがある。本章ではそれらの先行研究をふまえ、また整理するかたちで、マンガとミュージアムの関係について考える。

その考察にあたっては、マンガとミュージアムそれぞれの定義についてまず確認をする必要があるだろう。

#### (1) マンガの定義

少々肩透かしのようなになるかもしれないが、実はマンガ研究において、マンガ(まんが、漫画)についての明確な定義が存在しているわけではない。では、一般的な辞書・事典では、どのような説明を行っているのだろうか。それをまず確認してみることにする(引用はいずれも電子辞書版から)。

『広辞苑』(まんが【漫画】)

- ①単純・軽妙な手法で描かれた、滑稽と誇張を主とする絵。
- ②特に、社会批評・風刺を主眼とした戯画。ポンチ絵。
- ③絵を連ね、多くはせりふをそえて表現した物語。コミック。

『精選版 日本国語大辞典』(まんが【漫画】)

- ①自由奔放な筆致で絵を描くこと。また、その絵。風俗画、戯画、滑稽画などの類。そぞろがき。

- ②(英 *caricature* の訳語)特に、社会批評、風刺などを主眼とした単純軽快な絵。ポンチ絵。一コマ、四コマなどで、ふきだしを伴う場合もある。また物語などを、絵と、ふきだしに書き込んだ会話でつづるもの。本来、滑稽さを主眼にしたものだが、劇画、ストーリー漫画の類も含んでいう。漫筆画。

『ブリタニカ国際大百科事典』(まんが(*cartoon; comics*))

漫画。滑稽または風刺的な目的で描かれる絵。コミックスの同義語。単純な笑いを意図したものから、政治的、社会的なものまで多くの形式がある。印刷術の発展とともに急速に発達し、17世紀ごろからフランスではJ.カロラの版画によるまんがが注目され、19世紀にはH.ドーミエの風刺的芸術作品が生まれた。イギリスでは1841年に風刺週刊誌『パンチ』が出され、世界各地に波及、現在では専門誌のほかに新聞、週刊誌、映画などを媒体として数多く発表されている。

上記の各説明をみると、辞典や事典の編集方針の違いが出ているのが分かる。すなわち日本語の辞書・辞典である『広辞苑』と『日本国語大辞典』は、日本のマンガを中心に説明する記述であり、『ブリタニカ国際大百科事典』のほうは、日本のマンガとフランスやイギリスの版画、風刺画とマンガを並べての記述になっている。実は、そのあたりにマンガを定義する難しさがあるように思われる。

確かに、かつてのように12世紀後半～13世紀の鳥羽僧正筆とされる「鳥獣戯画」をもって、日本のマンガのはじまりとするような単純な見方は、深化している日本のマンガ研究においてはさすが見られない。しかし、それでも日本の視覚芸術の伝統の中において、マンガの源流を探ろうという立場、見方はある(日本におけるその起源については、後章で論じるように、大英博物館の展示での説明と、日本のマンガ研究での定説との相違がみられる)。

その一方、日本でいうマンガは、海外では、例えばフランス語圏のバンド・デシネ(*bande dessinée*)、英語圏のカリカチュア(*caricature*)、カートゥーン(*cartoon*)、コミック(*comic*)などと重なるので、それらを含めた定義が求められるという考え方もある。

大英博物館のManga展でもマンガについての明確な定義はなかった。もっとも、最初の壁面に書かれた説明文には、「思いつくままに描く/Pictures run riots」というのがあった。『精選版 日本国語大辞典』の「自由奔放な筆致で絵を描くこと」の語義に近いニュアンスを含んだフレーズと言える。

いずれにしても、マンガの定義については、それを定める重要性を多くの研究者が指摘するものの、万人が納得するようなものは、すぐにはまとまらないかもしれない。と言うのも、マンガそのものが、権威や高級なもの、あるいはアカデミックなものへのアンチテーゼとして支持を得てきたサブカルチャー文化であるという側面があり、それゆえ定義そのものを拒む多様な表現であると考えられるからだ。

その一方で、戦後から現代にいたるマンガ作品に共通しているのは、そこにマンガの「表現の仕組み」＝「マンガのシステム」が、明らかに成り立っているという事実である。その「仕組み」を、マンガの生産者である描き手であるマンガ家や出版社、またそれを読む(消費する)読者が、「ルール」として間違いなく共有している。そうした「表現の仕組み」は、1960年代ごろから日本においてマンガ産業が急速に発達したと密接に関わっているという見方が定説だ<sup>4</sup>。

マンガの「表現の仕組み」は、コマ運び、絵における記号的なルールなど、読者にある程度の「リ

テラシー」を求めるものでもある。また、同時に日本語という言語のさまざまな特徴を押さえていなければ、マンガを読むという行為は十分には行えない。マンガ研究においては、そうした仕組み＝マンガのシステムに関する研究が盛んに行われており、その精緻化は進んでいる。

マンガの定義は、マンガ研究者や、その定義をもとに作品収集などの方針を立てるミュージアム関係者などのマネジメントの観点からすると、かなり重要なものである。ただ、多くの読者＝多くのミュージアム来訪者の目線に立てば、優先させるべくは、マンガそのものの定義ではなく、マンガのリテラシーをまず説明することだろう。現在、日本においても、マンガの読み方を知らない若い世代たちが増えていると言われる。

その意味では、大英博物館のManga展の展示の導入部で、日本のマンガの「表現の仕組み」についてまず解説していたのは、日本のマンガに慣れていない来館者も多く含まれることを見込んだ同展においては、現状をふまえた賢明な判断だったと言えるだろう。従来のマンガファンにとっては当たり前のことが、ミュージアムの来館者には必ずしもそうではないということの考慮は、日本のマンガミュージアムでも忘れてならないことなのかもしれない。

## (2) ミュージアムの定義

ミュージアムの定義としてよく使われるのは、ミュージアムとその専門スタッフのための国際機関である国際博物館会議(The International Council of Museum : ICOM = イコム)の定義である。ICOMの規約(第3条第1項)では現在以下のように定められている。

博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する、公衆に開かれた非営利の常設機関である<sup>5</sup>。

これまでも何度か修正されてきたこの定義は、近年、さらなる見直しが唱えられている。社会の変化にあわせたミュージアムの役割について再定義が必要だという議論の流れからである。採択は見送られたが、2019年に京都で開かれたICOMの大会では、下記のような定義が案として検討された(原文は英文、筆者の試訳を付けている)<sup>6</sup>。

Museums are democratising, inclusive and polyphonic spaces for critical dialogue about the pasts and the futures. Acknowledging and addressing the conflicts and challenges of the present, they hold artefacts and specimens in trust for society, safeguard diverse memories for future generations and guarantee equal rights and equal access to heritage for all people.

Museums are not for profit. They are participatory and transparent, and work in active partnership with and for diverse communities to collect, preserve, research, interpret, exhibit, and enhance understandings of the world, aiming to contribute to human dignity and social justice, global equality and planetary wellbeing.

博物館は、過去と未来についての批判的な対話のため、民主的な手続きで、あらゆるもの、多くの声を集める空間である。現在のさまざまな対立や問題を認識し、それに働きかける博



博物館は、社会のために文化的所産や標本類を、信託を受けて所有し、将来の世代のために多様な記憶を守り、すべての人々のために収蔵品への平等な権利とその平等な利用を保証する。

博物館は、営利を目的としない。博物館は、誰もが加われる透明性のあるものであり、人間の尊厳と社会的正義、世界の平等と地球的規模の幸福への貢献を目指し、多様なコミュニティとともに、またそのコミュニティのために、積極的に協働し、収集、保存、研究、翻訳、展示を行ない、世界についての理解を深める。

以上のような ICOM の定義(および定義の改正案)以外に、日本のミュージアム(博物館、美術館など)を論じる際には、博物館法第 2 条の次の定義がしばしば言及される<sup>7</sup>。

この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成を含む。以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(中略)をいう。

これまで見たように、ミュージアムの定義は、国際的な機関である ICOM や日本国内の法律で定められているものの、実際に設置、運営されているミュージアムを見ると、これらの定義に、それほど厳密にしばられていない。さまざまなミュージアムがつくられているという現状や動向からすると、ミュージアムの概念が拡大しているというのは間違いないだろう。

そのため、ミュージアムの定義としては、学際情報学の村田麻里子が指摘するように、「実際のところミュージアムや博物館と言う言葉が何を指すかは、とても曖昧であり、「貴重な資料を蒐集・保存・展示する機関の総称」として<sup>8</sup>、あえて“ゆるく”とらえておいたほうがよいのかもしれない。

以上のようなことを考えると、マンガとミュージアムの“遭遇”は、さまざまな可能性と、(定義を拒む・とらわれないといった意味でも)自由さを持つ二つの“メディア”が、出会うべくして出会い、「符合」し、「共同作業」を行う場となっていると捉えることができるのではないだろうか。そうだとすれば、次に見るように、日本の国内にさまざまな形態のマンガミュージアムが存在しているのも、むべなきことなのかもしれない。

## 2. 日本のマンガミュージアムの特徴

### (1) 日本のマンガミュージアムの現在

文化庁 HP によると、日本にある博物館の数は、2018 年 10 月時点の統計で 5,738 館である<sup>9</sup>。少なくとも数の上では、日本は世界でも有数の「博物館大国」だ。歴史博物館、総合博物館、科学博物館、野外博物館、美術博物館をはじめ、植物園、動物園、水族園、動植物園などを含むさまざまな種類の博物館＝ミュージアムが全国各地にある。それゆえとも言えるかもしれないが、日本にはミュージアムとマンガ文化が結びついた常設のマンガミュージアムも少なからず存在している。

中高生にも分かりやすくマンガミュージアムの特徴を解説した、伊藤遊らによる『マンガミュージアムへ行こう』では、日本国内から以下の 18 館のマンガミュージアムを選び、紹介している。

- (秋田県) 横手市増田まんが美術館 (開館年 1995 年)
- (宮城県) 長井勝一漫画美術館 (1998 年)
- (東京都) 明治大学米沢嘉博記念図書館(2009 年)  
長谷川町子美術館(1985 年)  
杉並アニメーションミュージアム(2005 年)  
青梅赤塚不二夫会館(2003 年)  
三鷹の森ジブリ美術館(2001 年)
- (神奈川県) 川崎市藤子・F・不二雄ミュージアム(2011 年)  
横浜アンパンマンこどもミュージアム&モール(2007 年)
- (京都府) 京都国際マンガミュージアム(2006 年)
- (兵庫県) 宝塚市立手塚治虫記念館(1994 年)
- (鳥取県) 水木しげる記念館(2003 年)
- (岡山県) 吉備川上ふれあい漫画美術館(1994 年)  
いがらしゆみこ美術館(2000 年)
- (広島県) 広島市まんが図書館(1997 年)
- (高知県) 香美市立やなせたかし記念館(1996 年)  
横山隆一記念まんが館(2002 年)
- (福岡県) 北九州市漫画ミュージアム(2012 年)

同書の巻末では、マンガミュージアムを「マンガ関連文化施設」として言い換えし、表智之らの共著『マンガとミュージアムが会うとき』掲載の一覧を更新するかたちで、上記のミュージアムを含む67の施設を一覧にまとめている<sup>10</sup>。その中には宮城県石巻市の石ノ森萬画館(2001年)、神奈川県川崎市の川崎市民ミュージアム(1989年)などが含まれている。また、有名マンガ家の名前を冠したものも多く、その場所はその作家の出身地につくられるケースが多い。

67館に加え、『マンガミュージアムへ行こう』の後書きでは、2013年に新潟県マンガ・アニメ情報館など3館が新たなミュージアム開館したことが紹介されている<sup>11</sup>。また、2020年6月には、東京都豊島区に、かつて手塚治虫ら多くの漫画家が暮らしたアパートを再現したトキワ壮マンガミュージアムが開館。その一方で、地方の小規模な施設の把握が難しいことに加え、運営難などから閉館、統合なども例もある。そのため、マンガミュージアムは日本で「50～60館程度」存在していると捉えたほうがやはりよさそうだ。

日本でマンガ関連のミュージアムが増える大きなきっかけになったのは、1990年に東京国立近代美術館における「手塚治虫展」の開催だったとされる。上記で確認した日本のマンガミュージアムも、一部を除き、そのほとんどが1990年代以降の開館であるのも、そのような経緯を背景にしている。国立の代表的なミュージアムが、ポピュラーカルチャーであるマンガを「解禁」し、「アート」とし展示する“お墨付き”を与えたことで、ミュージアムという文化施設とマンガとの距離が一気に縮まったという経緯は、「文化」について総体的に考えるときに、見落としてはならない事実である。

## (2) 日本のマンガミュージアムの類型

メディア文化論の増田のぞみは、『ポピュラー文化ミュージアム』に収めた論考「マンガ関連

ミュージアム」の中で、マンガミュージアムを、「総合施設型」、「図書館型」、「地域振興型」、「テーマパーク型」、「企業設置(歴史展示)型」の5つのカテゴリーに分類している。増田の分類およびその説明を簡潔にまとめると以下ようになる<sup>12</sup>。

「総合施設型」は、「マンガ関連資料の総合的な収集・保存・活用を幅広く実践し」、「特定の地域や作家に関する資料を扱うのではなく、広くマンガ文化全般をその対象」としているミュージアムとする。その例として、川崎市民ミュージアム、京都国際マンガミュージアム、米沢嘉博記念図書館、北九州市漫画ミュージアムの4館を挙げる。

「図書館型」は、「マンガ資料の収集・保存」と「館内での閲覧(一部貸し出し)」利用を供しているミュージアムである。その例として、国際児童文学館(現在は大阪府立中央図書館内に移設)、広島市まんが図書館、現代マンガ図書館(現在は明治大学の施設)などがある。

「地域志向型」は、「地域にゆかりのある特定の作家に関わる資料を中心に所蔵」とともに、「その地域の文化振興(まちおこし)」を担うミュージアムと位置づけ、さいたま市立漫画会館、横山隆一記念まんが館、石ノ森萬画館などがそれにあたる。

「テーマパーク型」は、「来館者の『体験』を重視」し、「娯乐的・商業的要素が強い」とする。ミュージアムと称していても、マンガに関する資料の収集や保存に注力しておらず、施設自体がテーマパークのような、香美市立やなせたかし記念館や三鷹の森ジブリ美術館、横浜アンパンマンこどもミュージアムなどをこの分類に入れる。

「企業設置(歴史展示)型」は、企業がその名称を冠して設置し、自社の商品や社史を紹介している、海洋堂フィギュアミュージアム黒壁龍遊館(滋賀県長浜市)、おもちゃのまちバンダイミュージアム(栃木県)などの施設で、企業ミュージアムともされる形態である。

上記の分類は、日本のマンガミュージアムの現状をふまえ、的確になされている。大英博物館 Manga 展は、これらの5つに分類される日本のマンガミュージアムの特徴をすべて盛り込むような企画展示がされていた感がある。詳しい説明は後章にゆだねるが、一見、大英博物館には似つかわしくないような「テーマパーク型」、「企業設置(歴史展示)型」も、展示の要素として含んでいたのである。

例えば、コスプレ撮影のようなコーナーを設けていたのは、来館者の体験を重視する「テーマパーク型」であるし、また大手漫画出版社の、日本のマンガ文化における大きな役割を意識的に展示していた点では、「企業設置(歴史展示)型」の要素も間違いなくあったといえる。そうした意味では、Manga 展は、日本の各マンガミュージアムのこれまでの取り組みを、総合的にまとめ上げたという側面もあったと言える。

ところで、日本のマンガミュージアムが恒常的に抱えている悩みは、多くの関係者がいつも口にするように、もともとマンガが展示に不向きであるという点である。例えばマンガ雑誌などは読み捨てられることを前提に粗悪な紙が使われている。コミックスなどの製本も長期的な保存をする図書館の蔵書にはあまり向いていない。



加えてマンガ印刷に使われたオリジナル原稿も、印刷が終わったら破棄され、マンガ作家の手元にも出版社にも残っていないという、ないがしろにされてきた状況が長くあった。さすがに、かつての浮世絵の二の舞にするべきではないという声もあがるようになり、ようやく最近はその傾向が改まるようになってきているというが、それでももともとミュージアムでの展示用に作品が制作されるのではないだけに、マンガのミュージアム展示はいくつかの課題が残る。

その課題の解決に向けて意識的に取り組んでいる漫画家の一人は竹宮恵子だ。竹宮は、大英博物館 Manga 展においても、近年意欲的に研究を重ねている「原画ダッシュ」と呼ばれる、原画の代わりに十分なりうる複製原画を何点か展示し、それを積極的にアピールしたいという意気込みをもっていったようだ<sup>13</sup>。

### 3. 海外のマンガミュージアムと大英博物館

日本以外の世界のマンガ大国と言えば、ヨーロッパではフランスとベルギーである。日本のマンガにあたるのは、バンド・デシネだ。日本のマンガよりも絵画性が高いという特徴を持つ。

『マンガミュージアムへ行こう』は、フランス・アングレーム市にある「バンド・デシネおよびイメージ国際都市 (la Cité internationale de la bande dessinée et l'image : CIBDI)」を紹介している。同市では、1974年から毎年1月から2月ごろに、国際マンガフェスティバルが開催されており、それがCIBDIの1990年開館につながったという。翌91年には、図書館に加えミュージアム施設がつくられた<sup>14</sup>。

また同国では、ルーブル美術館が近年マンガに大きな関心を寄せており、バンド・デシネ、マンガを「第9の芸術」とする企画を立ち上げるなど力を入れている。「第9の芸術」というのは、建築、彫刻、絵画、音楽、文学(詩)、演劇、映画、メディア芸術に続く芸術という意味とされる。

フランス語圏のベルギーには、二つの注目すべきマンガミュージアムがある。ひとつがブリュッセル市内にあるベルギー・バンド・デシネセンター (Centre Belge de la Bande Dessinée) と、同郊外にあるミュージアム「ミュゼ・エルジェ (Musée Hergé)」である。前者は、中二階でバンド・デシネ(マンガを含む)の歴史や同館所有の原画などを展示、二階・三階は企画展などを開催している。一階にはライブラリーとミュージアムショップがある。後者は、「タンタンの冒険」の作者を記念した施設だ。また、ブリュッセル中央駅近くには、人気アニメのフィギュアなどを展示したMOOFミュージアム (Museum of Original Figurines) がある。

こうしたフランス、ベルギーにおけるマンガ文化の土壌と比べると、英国でマンガがそれほど受容されていないことは、本稿の冒頭でも述べたことである。それでも同国の風刺画の伝統は確固として受け継がれており、大英博物館の近くにある「カートゥーン・ミュージアム (The Cartoon Museum)」は、風刺画の原画や英国のグラフィックノベル作家や人気キャラクターなどを展示している。

さて、大英博物館であるが、権威的な同館が Manga 展開催に向けた「ゴーサイン」を出したのはそう簡単なことではなかったことは容易に想像できる。しかし、同館が江戸時代のポップカルチャーでもあった浮世絵の優れたコレクションを持っているのはよく知られており、近年では、日本で開催することが難しいとされた春画展(2013年)や葛飾北斎の晩年の作品を中心とした「Hokusai Beyond The Great Wave」展(2017年)などを企画し、多くの観客を動員した。そうした素地もあって、マンガも浮世絵と同じように日本の文化として注目すべきだという流れはつくられていたようだ。

こうした開催までの経緯の“裏側”については、キュレーションにあたったひとりの松葉涼子が、『画材研究 美術の窓』に寄せた「Why Manga in the British Museum?」に詳しい<sup>15</sup>。

同エッセイに書かれた展示会の経緯を、一部補足しつつ、まとめると次のようになる。

- ・もともと大英博物館は、日本コレクションが3万点にも及ぶなど日本の豊かな文化資源を所蔵し、継続的な収集を続けている。
- ・マンガにおいては、2006年以降、日本関係の常設展(The Japanese Gallery)でマンガを紹介するセクションを設けている。(マンガの原画収集も進めている。)
- ・2009年、星野之宣氏の作品展(Manga: Professor Munakata's British Museum Adventure)を開催した。同氏の代表作のひとつ「宗像教授」では、主人公の民俗学者が大英を訪れるシリーズもある。
- ・15年には、星野、ちばてつや、中村光3氏の作品展(Manga now three generations)を開催。小規模ながら、好評を得、10万人近くが訪れた。
- ・大規模展示会の計画が具体的にスタートしたのは2017年ごろだった。

松葉も指摘するように、Manga 展の開催実現にあたっては、同展のニコル・ルーマニエール主任学芸員の存在が大きい。彼女の人脉で、日本のマンガ家や出版関係者、マンガミュージアム関係者などに協力を仰ぐことができたというのは見逃せない点だろう。また、国立新美術館、マンガ・アニメ展示促進機構からの協力や、文化庁のメディア芸術促進事業に加わることもできたということも、開催実現を後押ししたようだ<sup>16</sup>。

こうして実現の運びとなった Manga 展は、開催が近づくにつれ、日本でも大きな関心と呼ぶことになる。次章では、日本における同展をめぐる報道について検証する。

## 第2章 大英博物館 Manga 展をめぐるメディア言説の分析

本章では、日本のメディアが、Manga 展の開催前、および開幕後、どのようなタイミングで、どのように同展を報じたかを整理したい。

こうした確認作業を行うのは、大規模なマンガ展が海外で、しかもそれが大英博物館で開催される・開催されたというニュースの扱いが、すなわち日本におけるマンガと大英博物館に対する文化的な価値判断を含むイメージに基づいていると考えられるからだ。

ニュース報道には、少なからず社会的、文化的な価値が含まれる。発信されたニュースは、受け手がその価値を受け入れたり、それに反発したりする。あるいは受け手から、別の受け手へニュースが再発信される場合もある。そうした過程の中で、ニュースの価値が再生産されたり、あるいは新たな情報が加わって、別の新しい価値がつくられたりする。そしてそうした価値は、常に人々が持つイメージとともにある。

メディアによって発せられた情報は、文化的施設であるミュージアムの企画や運営と無関係ではありえない。むしろ(まともな)ミュージアム関係者なら、ニュースの報じられ方を、きちんと分析するはずである。また、作品が展示される作家にしてみれば、ミュージアムに自作が展示されることが報じられることは、自分の作品が高い評価を受けていることを確認することにもなる。したがって、Manga 展に関するメディア報道を検証することは、マンガという文化をめぐる価値の作られ方、その価値の流通、そしてマンガやミュージアムをめぐる、社会的、文化的環境について考察するための重要な作業となる。

なお本稿では、マンガ、アニメと親和性の高いSNSを分析対象とはせず、ニュースソースの「確からしさ」という観点から、“オールドメディア”である新聞、雑誌というプリントメディアとテレビに分析対象を絞っている。

## 1. 日本のメディアのナラティブ分析(開幕前の事前報道について)

日本の新聞メディアが開催の近づいた Manga 展について報じ始めるのは、開幕1か月ほど前の2020年4月26日からである。大英博物館と Manga 展を共催した「マンガ・アニメ展示促進機構」の25日(25日)の発表を受け、新聞各社などが加入する通信社・共同通信社が配信した記事は以下のような内容だった。

ロンドンの大英博物館で5月に始まる「マンガ展」に日本から約50人の漫画家らが参加し、約1100平方メートルの会場に原画類約240点が展示される。博物館と共催する「マンガ・アニメ展示促進機構」(東京)が25日発表した。国外の漫画展として過去最大規模で、同機構は「視覚で伝える日本最大の物語芸術の魅力が、大英博物館によって全世界に発信される展覧会になる」と期待している。

「The City exhibition Manga」と題する展示を象徴する作品に、野田サトルさんの冒険活劇「ゴールデンカムイ」を採用。導入部を含め7部構成の展示では、漫画の描き方や読み方、歴史、ジャンルなどを解説、幕末・明治期の浮世絵師、川鍋暁斎の「新富座妖怪引幕」の現物(全長約17メートル)も展示する。

手塚治虫さん、赤塚不二夫さん、さいとう・たかおさん、ちばてつやさん、萩尾望都さんら日本漫画の功労者に加え、井上雄彦さん、こうの史代さん、鳥山明さん、尾田栄一郎さん、青山剛昌さんら現代の人気作家の計約70作品が紹介される。

アニメ、ゲームの多メディア展開も「ポケットモンスター」などを例に解説。世界最大の同人誌即売会コミックマーケットにも触れ、ファンの2次創作にも着目する。

5月23日～8月26日までの会期中は無休。入場料は大人19.5ポンドと決まった。

共同が配信した上記記事の掲載が確認できた新聞名とその掲載日は以下のとおりである((夕刊)の記載がない場合は朝刊。以下同じ)。

- 4月26日付 新潟日報、大阪日日新聞、北日本新聞、日本海新聞、四国新聞、宮崎日日新聞、琉球新報
- 4月30日付 日本経済新聞、日本農業新聞
- 5月2日付 中国新聞、熊本日日新聞(夕刊)
- 5月4日付 下野新聞
- 5月7日付 神戸新聞(夕刊)
- 5月10日付 北海道新聞、沖縄タイムス
- 5月23日付 愛媛新聞

もっともこの配信記事の全文を各紙が報じたわけではない。各紙面での扱いを見ると、新聞社の紙面の都合や、編集の現場ニュースの価値判断などで全文の掲載は見送り、記事を短くした紙面も

少なくない。それでも、Manga 展開催まで1か月を切ったタイミングで、各メディアに影響力を持つ通信社が発信した記事は、掲載日の違いはあるにせよ、多くの新聞社が取り上げ(おそらくテレビ、ラジオなどの契約社もニュースにしたと考えられる)、イベントの認知度を高めるには大きな効果があったはずである。

掲載紙の中には、『新潟日報』のように、同県ゆかりの漫画家・赤塚不二夫の名前を強調して記事を「加工」した紙面もある(赤塚の父親が新潟出身)。日本のマンガ文化も、地域によって受容度の温度差があるというのは、筆者のかねてからの見立てだが、著名な漫画家を輩出している地域(例えば新潟県、高知県、福岡県など)は、マンガに特化したミュージアム施設が充実するなど、やはりマンガ文化を支える機運が高い。

Manga 展に関して、竹宮恵子の出身地である徳島の地元紙『徳島新聞』は、開催の4日前の5月19日のタイミングで記事を掲載している。しかも8段の大きな扱いで、「地元ネタ」とすべく記事を上手に仕立てた。具体的には、記事のリードにある「日本から約50人の漫画家らが参加し」の部分に、「日本から徳島市出身の竹宮恵子さんら約50人の漫画家らが参加し」と竹宮の名前を入れ、顔写真と彼女の代表作のひとつであり、Manga 展でも展示された「風と木の詩」の冒頭シーンを用意した。とりわけ目を引くのが「竹宮さんに思いを聞く」としたインタビューである。

京都国際マンガミュージアムを京都市と共同運営する京都精華大学でマンガを教え、学長も務めた竹宮は、マンガとミュージアムの関係を考える上で欠かせない人物のひとりである。この『徳島新聞』の記事は、地方紙ゆえ全国紙に比べ多くの読者に届くことはなかったかもしれないが、Manga 展の日本での事前報道の中でも秀逸な報道のひとつだ。その彼女へのインタビュー内容は次のようなものであった。

—海外で作品が展示されるのは何回目か？

パリのポンピドゥーセンターとデンマーク大学で展示されたことがあるので、3度目になる。「マンガ」というジャンルが日本を代表する文化として成長し、世界中にマンガファンを増やしていることを誇りに思う。マンガの幅広さを感じ取れる展示になってほしいし、多様性や価値を感じてほしい。

—日本を代表する漫画家50人に選ばれた。

外されなくてよかったです(笑)。問題作が多いし、一筋縄ではいかない漫画家だと思っているので、大英博物館はちゃんと深く理解してくれてうれしい。

—「風と木の詩」や「地球へ…」を海外の人にとどのように感じてもらいたいか。

残念ながら漫画は、展示に向いておらず、一部の場面しか紹介できない。でも読んでみたい「中身を知りたい」と思ってくれたら。どのページも見人をつかえる工夫をしてきた。漫画は読み捨てられる媒体だったが、ちぎれたページの一部からでも魅力を発信しないといけないと思っている。そのページから前後の場面を想像してほしい。

「花の24年組」の代表的なマンガ家で、「少女マンガ」というジャンルの発展に大きく貢献してきた竹宮のような“大御所”でさえ、展示作品からもれなかったことに安堵しているのは興味深い。そこには大英博物館に「選ばれる」ことを、多くのマンガ家たちが“ステイタス”として捉えたことが伺える。それは一方で、選ばれなかった有力なマンガ家たちには、Manga 展での人選への多くの疑問符が残っただろうということは、想像するに難くない。

共同通信が配信した Manga 展開催の事前報道は、4月26日から加盟社の紙面で掲載がはじまり、各紙の紙面の判断で扱い方や掲載のタイミングが決まって、報じられることとなった。(日本と英国の時差はあるが、)いよいよ開催初日となる5月23日には、『河北新報』が、「Manga 世界が認めた」などの見出しで時事通信の配信記事を掲載した。同記事で注目すべきは、大英博物館のキーパーソン二人のコメントを掲載していることである。ひとは館長のハートウィグ・フィッシャー氏、もう一人は日本部門のトップであるティモシー・クラーク氏である。取材から得たコメントは以下のように掲載されている。

「数世紀に及ぶ日本の伝統を踏まえた素晴らしい漫画作品は、独創的なストーリーでわれわれを興奮させ、その世界に引き込む視覚的な力を持っている」 (フィッシャー館長)

「大英博物館は人類の文化の博物館だ。現代日本の一番面白いところを、将来のために収集し、共有していきたい」 (クラーク氏)

そのほか『朝日新聞』や『読売新聞』が、5月21日と22日の両日に大英博物館であったプレス向けの内覧会での取材をもとにした記事を、館内の展示の写真をとともに、5月23日の夕刊で伝えた。日本時間で同日夕となる展示オープンのタイミングを見計らったの掲載だろう。

テレビの報道は、開幕直前あるいは開幕日にその速報性を生かした。ニュース番組や情報番組で、大英博物館での内覧会を受けたいち早くの報道が目立つことになった。東京キー局やNHKの番組での扱いは、調べられた範囲では以下のとおりである。

日本テレビは、5月21日午後11時から始まる「news zero」で、内覧会での取材をもとに、「海外では最大規模 大英博物館でマンガ展」のニュースを速報として流した(約2分23秒の放送)。また翌22日の午前4時からの「おはよん Oha4 NEWS LIVE」で、さらに5時40分ごろには改めて同番組のエンタメコーナーで、「アトムやルフィが大集合! マンガで学ぶ“日本の文化”」のテロップを流して報じた(映像は、ほぼ「news zero」で流したのと同じ)。また午前8時からの情報番組「スッキリ」では、1分57秒ほど扱った。

テレビ朝日は、5月22日の早朝4時55分からの「グッド! モーニング」で約52秒、その夜9時54分からの「報道ステーション」で約1分58秒の長さで、Manga 展を伝えた。

TBS テレビは、5月22日の午前8時からの情報番組「ビビット」で約1分44秒、午後4時からの「Nスタ」でコメンテーターの感想などを交えて約2分34秒、午後11時からの「NEWS23」で約1分15秒ほど扱った。また翌23日午前4時からの「はやドキ!」は約1分15秒の長さの扱いだった。

フジテレビは、22日の夜11時40分から始まる「Live News α」で、約4分40秒の尺で報じた。また、26日には、24日に開かれた Manga 展のトークイベントに出席した「キャプテン翼」の作者・高橋洋一氏のインタビュー映像などを交え、約1分8秒の長さで紹介した。

NHK は、4月23日の4時30分からの「おはよう日本」で1分41秒ほどのニュースを2回流した。

以上のように Manga 展開催に向けての日本の新聞やテレビメディアの報道は、紙面の扱いや放送時間の長さからしても、日本国内における同展の開催に関する関心を、少なからず高めることになったのは間違いないと考えられる。



## 2. 日本のメディアのナラティブ分析(開幕後の報道について)

Manga 展開幕のニュースは、共同通信のロンドン発の記事を受けて、5月24日から日本の各紙が報じた。確認したのは以下の16紙である。

- 5月24日付 北海道新聞(写真は時事通信のもの)、東奥日報、岩手日報、秋田魁新聞、中部経済新聞、信濃毎日新聞、京都新聞、中国新聞、四国新聞、長崎新聞、熊本日日新聞、宮崎日日新聞、琉球新報、沖縄タイムス
- 5月25日付 静岡新聞
- 5月27日付 西日本新聞(夕刊)

共同通信の記事は、先に見た予報記事の焼き直しのような内容にとどまっていたが、会場を訪れたイタリアの画家の、「漫画やアニメが以前から大好き。精緻な作画がどのようにできるかが分かってとても勉強になった」というコメントを紹介した。ただし、そのコメントを載せる前の段落で記事を切っている紙面も多く、掲載は上記16紙中、6紙にとどまった。

一方、ロンドン支局に特派員を置く全国紙などでは、内覧会での取材などをもとに、独自記事を掲載した。掲載の日付と記事の見出しは以下の通りである(前述した朝日と読売含む)。

- 5月23日 朝日新聞(夕刊) 「英で Manga 展 海外で史上最大規模」  
読売新聞(夕刊) 「海外最大級のマンガ展 大英博物館」
- 5月24日 読売新聞 「ロンドンわくわく『Manga』展開幕」  
東京新聞(夕刊) 「Manga 世界に誇るアート」

\* 赤旗は「風くるま」欄で時事通信の配信記事を掲載

『読売新聞』は、5月23日付夕刊と翌24日付朝刊と続けての報道である。海外で「最大規模」「最大級」など、マンガが世界で広がっている様子を強調する見出しが付けられている。

Manga 展が始まった後は、記事の内容も次第に深まっていく。その中で『読売新聞』の名物コラムである「編集手帳」の次のような筆の運びに注目したい。

その昔、図書館閲覧室ではマルクスや孫文、ガンジーらが研鑽を積んだという。知の殿堂との異名が似つかわしい。260年の歴史を刻むロンドンの大英博物館には世界中から年間600万人が訪れる。

お墨付きをありがたがるわけではない。けれど、超一級の館が最大規模の展覧会を開いたと聞くと、誇らしさが隠せない。日本マンガを紹介する「Manga」展が開幕し、盛況だそうだ。

権威や定義を拒む、ある種の猥雑さ、背徳性が、マンガを始めとするサブカルチャーの要諦と言えよう。大衆にこそ支持される文化をどう学術的に解き明かして、論じるのか。様々難しさがあつただろう。

本展を企画した研究者は日本留学時代に虜となり、膨大な量を読みあさったのだという。制作現場や書店の役割、同人誌にまで踏み込み、明治期の戯画とも比較展示した内容に愛の深さを思う。看板キャラに選んだアシリパさんは当代屈指の人気ヒロインで、アイヌの少女である。

ジャパノロジー(日本学)の一分野として国内外で探求が深まればいい。日本人の精神性、

行動様式に与えてきた影響は決して小さくない。(5月26日付)

同コラムは、大英博物館を、歴史的な偉人たちともゆかりの深い、権威ある「知の殿堂」とまず位置付ける。それゆえ、その場所で開かれた大規模な展覧会で日本マンガが紹介されて、人気を集めていることを、「誇らし」とする。マンガは、「日本人の精神性、行動様式」に大きな影響を与えてきたから、それを様々な角度から分析することは、国内外の「ジャパノロジー(日本学)」の深化につながる。同コラムはこのように整理し直すことができる。そこから窺えるある種の思考の過程は、おそらく日本のメディアの Manga 展への視線を集約したものになっているのではないだろうか。

「編集手帳」では、名前こそ出ていないものの、「本展を企画した研究者」であるニコル・ルーマニエール氏に言及している。同氏については、開催が近づいてきたあたりから、Manga 展を特集した雑誌などで、インタビュー記事などが掲載されるようになる。

Manga 展を、おそらく最初に日本の新聞紙面でさまざまな角度から論評したのは、5月31日付の『朝日新聞』だろう。「冒険? 大英での Manga 展」と見出しのついた記事はロンドン支局の石合力記者によるものだが、これまでの記事には見られなかったさまざまな情報が詰め込まれていた。

まず同記事は、大英博物館が Manga 展を開催するにいたった背景などを説明する。それを以下に箇条書きにして抜き出し、(少し文言も整えて)並べてみる。

- ・英国内のミュージアムの入館者数をテート・モダンに抜かれた大英は、権威主義的なイメージから脱却する試みを続けている。Manga 展には若い世代の新たな入場者を開拓する意図もある。
- ・前売り券の売れ行きは過去5年の特別展で最高。前売り券と入場者に占める割合は約23%で通常の特別展よりも高い。

そのような内容に加わえ記事は、おそらく日本の読者も関心を持ったであろう、英国内の反応について、有力メディアの評価を紹介するかたちで報じている。取り上げられたのは、タイムズ紙(*The Times*)、ガーディアン紙(*The Guardian*)、(ロンドン地下鉄駅などで無料配布の)夕刊紙・イブニング・スタンダード紙(*Evening Standard*)の三紙である。その内容を箇条書きに整理して以下に示す。

#### タイムズ紙

- ・「やり過ぎだ」として5段階評価の三つ星。
- ・「漫画の不思議な世界を常連に納得させるより、子供たちを大英の魅力に引き込むのに役立つかもしれない」

#### ガーディアン紙

- ・美術担当記者は、「目の大きい漫画の主人公を、北斎の作品と同じように注目すべきだ」と二つ星で酷評。
- ・一方、同紙の書籍コミック担当ライターは、「漫画は現代の文化に一世紀以上寄与してきた。その影響力を過小評価すべきではない」「大英が歴史に寄与する公的機関であるなら、漫画はまさに歴史になりつつある立派な表現手段だ」として論争に。

イブニング・スタンダード紙(夕刊紙)

- ・「オタク」文化への説明が少ないなどの点を差し引き星四つ。
- ・「漫画文化の気がかりな要素を無視し、めでたすぎる内容だ。それでも大いに楽しめる内容で、観た後に漫画の世界をより深く探りたくなる」

朝日新聞のこの記事は、英メディアの Manga 展の評価が分かれていることについて、大英博物館広報部からの、「大英が冒険的な試みをしたからこそ賛否両論が起きた。論争が起きたことで展示への関心が高まってきている」という回答を紹介している。なお、同記事の内容は、系列のテレビ朝日の6月2日の「サンデーステーション」が報じたニュース(約1分44秒)の中でも、英国内の反応の事例として盛り込まれた。

また、朝日の記事では、読売のコラムで「本展を企画した研究者」と書かれ、同展の企画の中心となったルーマニエール氏を、企画担当者として実名で出し、「文字よりも絵を通して伝えるインスタグラムの時代。デジタルメディアに慣れた『Z世代』の若者にとって漫画の役割は大きくなりつつある。漫画は、22世紀の一つの共通言語になると思う」という彼女のコメントで記事をまとめている。

前述したようにルーマニエール氏については、開幕が近づいたあたりからインタビュー記事が増え始めるが、同時に掲載される媒体も多様化していく(『T Japan: New York Times Style Magazine』『Happer's BAZAAR』2019年6月号など)。それらの記事に見られるのは、大英博物館での Manga 展が実現した背景に、マンガへの熱い思いのある彼女の卓越したキュレーションがあったという基調である。

『スポーツニッポン』は8月5日付の紙面で「日本漫画 英国から広めます」という見出しで、Manga 展を担当したルーマニエール氏に焦点を当て記事にした。打合せのため訪日した彼女を、出版各社めぐりの合間に取材し、「英国の漫画好き女子が世界一の博物館から発するマンガ愛」などと書いた(ちなみに氏は、米国ニューヨーク市の出身)。

そうした記事の一方、Manga 展の会期が進むにつれ、全国紙などで、詳細な展示の報告や、マンガ文化をめぐる深い分析記事が増えていく。

『東京新聞』は、6月19日付夕刊で、「MANGA 英に旋風 大英博物館と浦沢氏個展 同時に開催」という記事で、同時期にロンドンのジャパン・ハウスで英国初の個展を開いた、「MONSTER」などで知られる浦沢直樹の記事を掲載した。

『読売新聞』は、6月18日付から20日付紙面まで3回にわたり、石田汗太編集委員による「マンガのくに」を連載した。

『産経新聞』は、6月23日付と30日付の紙面で、本間英士記者による「大英博物館で Manga 展」を上下で掲載した(これらの記事の内容は、後章で改めて触れる)。

以上のように Manga 展に関する記事は、開幕のおよそ1か月前から各紙に掲載され、開幕から1か月後には展示の内容に踏み込んだ記事が掲載されるようになる。

8月26日の閉幕の際には、『読売新聞』、『日経新聞』(夕刊)(いずれも8月28日付)などが短く報じ、会期中の入館者が約17万5000人であったこと、そのうち約2割が16歳未満だったことなどを報じている。読売は、ルーマニエール氏の「大英博物館に、より多様で若い観客を引き入れることができた。英国人にマンガの見方を分かってもらえたと信じている」というコメントを載せた。

本稿に続く論考では、英国メディアの Manga 展の反応、実際の展示分析、同展の展示内容と日本のマンガ研究との比較などを行う。

- 1 『東京新聞』2019年6月19日付(夕刊)「MANGA 英に旋風 大英博物館と浦沢氏個展 同時に開催」。同記事の中で、英ニールセンブック、仏 GfK の調査として数字が出ている。
- 2 ニコル・クーリッジ・ルーマニエール、松葉涼子(山川早霧、飯原裕美訳)『マンガ! 大英博物館マンガ展図録』(三省堂、2020)
- 3 増田のぞみ「マンガ関連ミュージアム」石田・村田・山中編『ポピュラー文化ミュージアム』(ミネルヴァ書房、2013)188
- 4 マンガのシステムについて最初に体系的に分析した記念碑的な一冊は、1995年刊行の『別冊宝島 EX マンガの読み方』(宝島社)である。
- 5 <https://icomjapan.org/about/> から ICOM 規約を閲覧
- 6 同大会については松田陽「ICOM 博物館定義の再考」を参照のこと。  
<https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/>(『博物館研究』Vol.55 別冊(ICOM 京都大会 2019 特集)の再録)
- 7 博物館法(公布 1962 年、最新改正 2019 年)  
[https://elaws.egov.go.jp/search/elawsSearch/elaws\\_search/lsg0500/detail?lawId=326AC1000000285](https://elaws.egov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=326AC1000000285)
- 8 村田麻里子「ミュージアムから考える」『ポピュラー文化ミュージアム』5
- 9 文化庁 HP 博物館「博物館の振興 2. 博物館数、入館者数、学芸員数の推移」  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan\\_hakubutsukan/shinko/suii/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/suii/)
- 10 伊藤遊ほか著『マンガミュージアムへ行こう』(岩波書店、2014)207-212
- 11 『マンガミュージアムへ行こう』213
- 12 増田のぞみ「マンガ関連ミュージアム」石田・村田・山中編『ポピュラー文化ミュージアム』(ミネルヴァ書房、2013)188-194
- 13 『高知新聞』2019年5月19日付「23日から大英博物館で『マンガ展』」
- 14 谷川竜一「ミュゼ・エルジェとベルギー漫画センター」『マンガミュージアムへ行こう』163-167
- 15 松葉涼子「Why Manga in the British Museum?」『画材大研究 美術の窓』(July 2019)146
- 16 松葉涼子「Why Manga in the British Museum?」146

## 引用・参考文献

- 伊藤遊「<マンガ環境>を考える—「マンガミュージアム」の困難と可能性」『LRG: ライブラリー・リソース・ガイド』第24号(2018、アカデミック・リソース・ガイド)86-91
- 伊藤遊・谷川竜一・村田麻里子・山中千恵『マンガミュージアムへ行こう』(岩波書店、2014)
- 石田佐恵子・村田麻里子・山中千恵編『ポピュラー文化ミュージアム』(ミネルヴァ書房、2013)
- 大城房美・一木順・本浜秀彦編『マンガは越境する!』(世界思想社、2010)
- 表智之・金澤韻・村田麻里子『マンガがミュージアムと出会うとき』(臨川書店、2009)
- 谷川竜一「ミュゼ・エルジェとベルギー漫画センター」伊藤・谷川・村田・山中『マンガミュージアムへ行こう』(岩波書店、2014)187-192
- 増田のぞみ「マンガ関連ミュージアム」石田・村田・山中編『ポピュラー文化ミュージアム』(ミネル

ヴァ書房、2013)187-216

松田陽「ICOM 博物館定義の再考」

<https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/>(『博物館研究』Vol.55 別冊の再録)

松葉涼子「Why Manga in the British Museum?」『画材大研究 美術の窓』(July 2019)146

村田麻里子「マンガの環境としての図書館—ミュージアムとの比較を通して」『LRG : ライブラリー・リソース・ガイド』第24号(2018、アカデミック・リソース・ガイド)72-85

『をちこち』19号(特集：マンガから Manga へ)(国際交流基金、2007)

『美術手帖』2016年8月号増刊(特集：「バンド・デシネ」のすべて)(美術出版社)

\* Manga 展についての新聞、雑誌、テレビでの報道についての資料収集は、セインズベリー日本芸術研究所(英国・ノーリッジ)の便宜をいただいた。ここに記して、謝辞を述べたい。



【大英博物館 Manga 展のビジュアル資料】



写真1 Manga 展開催中の大英博物館



写真2 Manga 展の会場となった  
セインズベリー展示ギャラリー



写真3 展示の導入部にある日本の  
マンガについての説明



写真4 マンガの表現の仕組みについての壁面を使った説明



写真5 展示の様子①



写真6 展示の様子②



写真7 展示の様子③



写真8 展示の様子④



写真9 コスプレコーナー

